

---

# 猫の存在

カブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫の存在

### 【Nコード】

N7060A

### 【作者名】

カブ

### 【あらすじ】

一人の少年の心が身体と共に変わっていく。そう、1匹の子猫と共に……。

## プロローグ（前書き）

何も変わらない毎日の生活をしている。

そんなとき一人の少年が道端を歩いていた時、ふと、

目に付いたのが、電柱の側にあるダンボール箱だった。少年は好

奇心が強いせいか、無意識の内にそのダンボールの箱の近くに行

くのだが……。

## プロローグ

（プロローグ）

毎日のように学校へ登校して、毎日のように下校する。

いつもと何の変わりのない毎日。

空は飛行機雲がちらほらあった。 たぶん明日は天気が悪いだろ  
うと思いつつながら。

そんな時、道の電柱の下の所に意味深に置いてある1箱のダンボールが目に入った。

好奇心旺盛な少年は、不思議に思いながらもそのダンボールへと足を踏み入れた。

徐々に少年とダンボールとの距離が縮まってくるにつれ、少年の心臓の鼓動がたちまち

早くなってきた。

ようやく少年はダンボールの下へと辿り着いた。少年の好奇心は、もう心臓が破裂しそうなくらい鼓動の速さを増していた。

徐々に少年は色白い自分の手をさし伸ばしながらゆっくりとダンボールに貼ってあるガムテープを徐々に剥がしていった。

ガムテープを全部はがし終わって少年は一呼吸入れて一度気持ちを落ち着かせた。

そして、ゆっくりと自分の左手を差し伸ばして開けてみた

なんとそこには1匹のしっぽの折れた子猫が、今までの少年の気持ちを覆す様な表情で目を閉じて身体を丸めて寝ていた。



## 第1章 全てはここから(前書き)

少々長くなりすぎましたので、そこんところ宜しくお願いします。  
後、読んでいて、文章間違いにお気づきの場合は、ご指摘お願いします  
ます m ( | ) m

## 第1章 全てはここから

↓第1章 全てはここから↓

ピピピピピピピピ．．． ガチャンッ

「うん．．． 今何時．．． ．．． ってヤバイ！ 遅刻しちゃう了。 またやってしまったな．．．。」

僕は、目を擦りながらゆっくりと起き上がった。

毎日のように学校に遅刻をしている．．． 言わば遅刻常習犯だ。別に将来何をやりたいという目標もない。ただ時間だけを過ごしている毎日。楽しいと思った日なんて一度もない。

そのせいか、僕の生活リズムが悪くなってきた。

「生きてて意味はあるのか．．．？」と思いながら

すると、その時冷たい風が僕のほおをかすかに当たった。

「ん？ ドアが開いている．．．。 昨日の夜ちゃんと閉めたはずなのに．．．。」

かすかに揺れ動くカーテンがそのことを否定しているようにも見えた。

でも、部屋には特に異常はなかった。ただ一つのことを除いては．．．。

僕はようやく重い腰を上げ、階段を下りて居間に行った。

机の上には朝食とメモが置いてあった。

僕は、そのメモを遠い目で見つめながら読んでいった。

愛する健ちゃんへ。

お母さん達は今日帰りが遅くなるから、そこんところ宜しくね。  
あ、そうそう 朝食はパンでいいよね？

あと、夕飯は適当に冷蔵庫から抜き出して食べちゃって。何かあると思うから。

それでは行ってきます。

### 愛しの母より

・・・はあ。僕は思わずため息が出てしまった。

「どこが愛する健ちゃん だよ・・・。愛してるんだっから、適当という言葉を使うなよ・・・。」

・・・はあ。また僕はため息が出た。

申し遅れたが僕の名前は「井川 健信」だ。 14歳だ。

ちなみに名前の由来は、「上杉謙信」から取ったものだそうだが、バカなコトに漢字を間違えたらしい・・・。

しかも家の両親は、いつまで経ってもバカカップル並みのラブラブモード。 うつとうしたらありゃしない。

だから、しょっちゅう遊んでばかりで家のコトをろくにしないバカ母と、

仕事にも行こうとしないバカ父なのである。

でも、父は仕事をしていないのに何故かお金だけは沢山ある。

なぜなら、父は強運が冴えたらしく、競馬の「デイープリンパクト」の券を買いきって、運よく9兆3億1千万も当てたのだ。

数字からして「931」とあるが、ホントにくさい・・・。

その大金が手に入る直前までは、母は父に嫌気が差していたらしく、離婚の話を持ち出していた がしかし、父が大金を当ててか

らは家の母は猫を被っているように父に惚れ直してしまった・・・。



ってか、金に惚れ直したんだろ・・・て思いながら。

性格の話になるのだが、僕は、特にハイテンションでもなく、特にローテンションでもない普通のテンションだ。性格は？　って聞かれたら、面倒くさがりやだけど、困った人などを放っておけないという性格のようだ。あと、父は、「まあ、いいやる」という軽い気持ちな性格。母は、うっとしい程で、現役女子高生が誰かと付き合っているような甘えた声でしゃべったり、ちよっかいをかけたりするのが好きなヤツ。

何でこんなヤツに父は惚れたのかと不思議に思っていることも少なくなはない。しかも年中無休のハイテンション。着いていけないったらありやあしない・・・。長くなってしまったが家族の自己紹介はこれまでだ。要するに3人家族ということだ。

時間が刻一刻と過ぎ去る・・・。それに感じたかせいかわ僕は少々急ぐようになった。

椅子に座って、机の上に開いてあるパンをむさぼりながら今日見た夢のことを思い出していた。

「何だったんだろうあの夢は・・・。僕だったのかな。」

それは、僕によく似た一人の少年であった。その夢やけには生々しかった。

「それに、あの猫・・・。何だったんだろう・・・。あの表情・・・心がすつきりしない。」

僕は、心の奥底に針がささったかのような痛みを一瞬覚えた。

「まあ、考えてもラチが開かないな。」

そう考えつつも、やはり、あの夢のことを考えてしまう。

ようやく朝食を食べ終わり、さっさと着替えた。

それから玄関まで行き、靴を履いて、ドアを開けて、閉めようと後

るを振り返った時

「今日は何かある」

と、何だか分らないけど、何かあるような気がしてたまらなかつた。

僕は急いで走っていた。・・・けど、だんだん疲れてきて、徐々に速度が落ちていった。

「どうせ遅刻だから、別に走らなくてもいいか」

という気持ちが頭によぎったので歩き足になった。

ようやく学校に着いた。時間はもう9:00を回っていた。

ちなみに、この学校の名前は「テンサイ学校」である。

「天才」「天災」・・・とどっちの意味か分からないがともかくそこの名前なのである。

学校の始業時間は8:45。クラス2つで、1つ35名という数少ない学校である。

僕は、目的が近くに見えてきたので、走りだした。

昇降口に入り、階段を上った。すると、自分のクラスが見えてきた。

ガラ・・・

「井川か・・・。お前は何回遅刻したら気がすむんだ？」

（・・・1000回）と心の中で思ってしまった。

「まあ、いい！ 席に着け。」

先生の顔も、もう呆れ顔だ。

「はい、何度もすみません・・・」

僕も自分に呆れてきた。

昼休み。

「井川君、今日も遅刻しちゃったね。これで何回目？」

近くにいた、僕の幼馴染の「穂並愛里」が喋りかけてきた。

「なぐんだ、穂並か。」

僕はそつけない返事をした。

「なぐんだ とは何よ!？」

「あ、ゴメンゴメン。つい・・・」

穂並は僕の性格のことを分かっていたせいか、それ以上はなにも問わなかった。でも話題を切り替えられ、

「話変わるけど、井川君って大切な人とかいる？」

穂並のあまりにも真剣な表情で質問されたので、ここは、ふざけてはいけないと思って、

「うん・・・。 やっぱり友人とかかな。 第2候補は家族だ

けどね」

さすがに家族とは言えなかったけど、大切ではない というわけじゃなかったので一応候補に入れた。

「井川君らしい答えね。」

穂並は何か寂しげな表情を張り巡らしながら、遠くを見ていた。

「そ〜いう穂並は誰なんだ？」

「え!？ わ、私!？」

いきなり、問われたのでびっくりした表情だった。

「穂並はお前しかいないだろ。」

僕は素直に優しく答えた。

「私はね・・・。 私も、友人とか家族かな! あと、恋人も・・・かな。」

穂並は何かを言いたげだった・・・と僕は悟った。 けど、なぜか、聞き出すことが出来なかった。

「そうか、同じだね・・・。」

「うん、同じ・・・。」

穂並はまた、寂しげな表情で遠くを見つめていた。

やはり、今日の穂並は可笑しい。それは、いくら、人に無関心の僕でも分かった。

#### 下校の時

僕は歩きながら今日の朝の夢といい、穂並のコトといい何か不思議に思っていた。

まるで、穂並が僕に何かを伝えたかったかのように……。そういふような気がしてたまらなかった。

僕は道端をうっむきながら歩いていた。無意識の内に電柱の方

に目をやった……すると

「え……？」

僕は驚いた。そこには夢で見た時と同じ色、形のダンボール箱が1箱があった。

## 第1章 全てはここから（後書き）

まだまだ、ド素人の身ですが、次話も宜しくお願いします

## 第2章 決断（前書き）

ストーリー上、時間の経過がそんなに経っていません。ご了承ください。

## 第2章 決断

「ま、まさかな・・・。」

僕は、恐る恐るそのダンボール箱へと近づいた。

1秒1秒がゆっくりと過ぎ去るような、そんなドキドキ感だった。

ようやくダンボール箱の所まで着いた。

僕は、ゆっくりと、右手を差し伸ばしてダンボール箱を開けてみた。  
すると、

「・・・なんでや。」

僕は、この現実が案外平凡なのに失望した。中は間抜けの空だったのである。

それと同時に、あの夢が自分でないというコトが分かったせいか、一つの悩み事が消えたのである。

ガチャン。

「ただいま〜」

って言っても誰もいないのである。僕はそれを知った時、なぜか虚しさを感じた。とその時、

「ニャー。」

どこからともなく猫の声が聞こえてきたのである。

「え・・・?」

僕は、背筋が凍りついた。何とその猫は、夢で見たあのしっぽの折れていて、色は黒色のちっちゃい子猫だったのだ。

しかも、玄関は鍵が閉まっっていて、1階の居間や、和室なども全て鍵がかかっている。

「まさか・・・。」

僕は、ふと、今朝のあの窓が開いていた時のコトを思い出した。そして、急ぎ足に階段を上って自分の部屋まで行った。

「やっぱりな……。」  
やはり、窓は開いていた。

僕は不思議に思いつながらも、少し後悔をしていた。

それは、今朝起きた時にこの部屋が少し違っていたことだ。早くに疑問に思いつて探るべきだったと。

そう違っていた　　と言うのは　　この部屋に猫のぬいぐるみがなかったことだ。

「まさか、お前……。」

前、猫のぬいぐるみが置いてあった場所からこの子猫に視線を変えると、子猫は何を思ったのか知らないが視線を逸らした。

「いや、それはないな。」

僕は首を振り、現実はこのようなコトはないだろうという肯定よりの否定が頭によぎった。

そのようなコトを考えている内に、自分が今しなければならぬというコトをすかさず悟った。

「そつだ、コイツを早くこの家から追い出さなきゃ。」

僕は、この子猫を抱きかかえて、階段を下りて、玄関の外まで行った。

「もう、入ってきちゃあダメだよ。」

僕は、この子猫の頭を撫でながら言った。

「ニャー……。」

子猫は、どこか心なしか悲しげな表情をしていた。

僕は、撫でていた手を引き下げ、子猫の方を見ながら玄関のドアを閉めた。

でも、僕は不思議に思っていた。

なぜなら、窓が開いていたということは、外から入ったということになる。

でも、あの猫を抱きかかえた時、猫の手足がそれを否定しているよ



うに見えた。

そう、猫の手足がきれいな、ピンク色を帯びた色だったことを。

「今日は、疲れたな。」

そう言う僕は、居間のソファで横になって、うとうとして、最終的に深い眠りについた。

ガチャン

「ただいま。」

僕は、この聞き慣れた声に目が覚めた。

そして、寝違えた首を押さえながら、

「あ、お帰り。」

と言った。

「健ちゃ〜ん、また寝てたんだあ〜」

母のどこか呆れ声が聞こえてきた。

お父さんと一緒に出かけたはずなのでは？と思いながら、

「そ〜いや、お父さんは？」

「あ〜、父さんね、この玄関の外にいた　か〜わゆい子猫ちゃんと一緒に抱擁している所みたい。」

僕は、この言葉で今まで、寝ぼけていたことが嘘のように目が覚めた状態になった。

「子猫つて……。あの、黒くてしっぽの折れた……。？」

僕は、目を丸くして母に問いかけた。

「え？　あの猫知ってるの〜？」

母は意外そうに僕の顔をじ〜っと見つめた。

「……。まあ。」

勝手に部屋に入ってきた、というコトなんてとんでもないけど言えない。　こ〜いう風に母と雑談をしていたら、

「お、健信。　見るこの子猫、可愛いだろ〜。　父さんが産んだんだぞ。」　すると母は、

「お父さん、アタシを差し置いて猫と浮気してたのね!? アタシ何かどうでもいいのね!？」

母は、このジョークが分からなかった。

「え、いや・・・その・・・。ほんの出来心で。」

父は、真面目に返答する母にジョークだと言つ事が言えずに、こんなあいまいな証言をしていた。

「お父さんのバカア!! もう知らない!! つん!!」

とうとうお母さんを怒らせてしまった。家の母は、ジョークがほとんど聞かないので厄介である。

その性格を知っているのになぜ、父はそんなコトを言つのだらうと思っていた。

(コイツ等、ホントにヴァカ・・・。しかも、ジョークだって普通に分かるだろ・・・。)

僕は呆れて物も言えなかった。

「ニヤニヤー。」

この子猫も、この両親をあざ笑うかのような表情だった。

「ホントにゴメンよ!! バカにするつもりはなかったんだって。」

父は、もう母に頭が上がない状態である。

「何よ!? 今更・・・ 謝ろつて言つの!? アンタが何

をしたかちゃんと分かつてんの!？」

母の暴走はもう、止まらない。

その光景を目にしていた僕は、このままじゃラチが開かないと悟つて、

「はい、お二人さんそこまで。」

僕は、手をパチパチと手を叩きながら親をなだめた。

(子供にこゝいうことをさせるなよ、って思いながら)

家族会議が開かれた。勿論この子猫についてだ。

「はい、これから、家族会議を始めます。異議のある人は」  
なぜか、母が指揮をとっていた。

「ない。」

僕と父さんが口を揃えるようにして言った。

「さて、問題はこのネコ……。どうしましょうか？」

母は、子猫の顔を見つめながら言った。

「飼ってもいいんじゃないか。」

父はあっさりした答えだった。

「健ちゃんは？」

母は、父の答えに納得がいかないような顔をしていた僕に言った。  
た。

「ちょっと考えさせて。」

そう、この両親からしては、何の変わりのない普通のネコに見えて  
いる。でも僕は違った。

ここ数日、不思議なコトが起こっていた上、このネコの「不思議  
さ」というモノがどうしてもあって、僕は即答出来ずにいた。

そう、例が あの「汚れていない手足」なのである。

母は、僕の表情が納得のいかないかのような表情に見えたせいか、

「健ちゃん、嫌なの？」

「嫌ではないけど……。」

「けど……？」

その先は、やはり言えなかった。自分の中にどうしても閉まいて  
みたい、そんな気持ちだった。

子猫も、僕の表情に気付いたせいか、ずっつと、僕の方を見てい  
る。

「健ちゃんの答えが出ない以上、先に進めないね。」

時間がとても、惜しい。出来ることならこのことを解決してから  
答えを出したい、そう思っていた。

でも、そんなことをしていたら、いつまで経っても答えが出ないと思ひ、

「・・・僕は、同意するよ。」

口調からして肯定という風に聞こえなかったせいか、

「嫌なら嫌って、はっきり言ってもいいんだよ？」

母は、気持ちが悪く踊っている僕をなだめた。

それを、聞いたせいか。僕にある決心が見ついた。

(コイツを側に置いて、様子を見てみるのも一つの手だな・・・)

そう思ったのである。

「よし！ 飼おう！」

僕は、今まで考えていたコトが嘘のようにすっかりした気分になった。

その表情を知ったせいか母は、

「じゃあ、決まりね。」

と、言った。

母も僕のすっかりした表情を見たせいか、母もほっとしていた。

## 第2章 決断（後書き）

次は、ネコの名前から入りますW

### 第3章 名前は・・・(前書き)

今回は短いです。 ちょっと強制的に筋を通らせてしまっ、よく意味が分からなる所が出てくるかもしれません・・・。 その時は、ご指摘お願いしたいです。

### 第3章 名前は・・・

「じゃあさ、次はどんなことについて話そっか？」

母は、腕を組みながら考えていた。

「お前のその性格・・・。」

父は、ケラケラ笑いながら母をからかった。

「ボキ、ボキ、ボキ」

母の指の音が、それ以上何も言わせないような感じに聞こえた。

「・・・は、問題ないっつと。」

父が口ごもるように、前の証言に接着剤を付けるかのような証言を言った。

僕は、この空気を追い払うように、

「んじゃあさ、子猫の名前を決めようよ！」

という、最もらしいことを述べた。

母は、組んでいた腕を下の状態に戻して、人差し指を首の方に当てながら、

「じゃあ・・・、チデジっていうのはどう？」

本気で言っているのか？と僕は思いながらも、

「ん〜と、モンタでどう？」

前々から思っていた名前だ。 やつと言えたことに僕は、感激を覚えた。

でも、父はすかさず、

「ないわ・・・。」

「んじゃあ、父さんは何がいいの!？」

このことで結構ムキになってしまった。

「父さん？ 父さんはね・・・! そうだ、やっぱリアレだな。」

「アレ・・・？」

僕と母さんが口を合わせて言った。

「デュープリンパクト！」

父は真顔だった。でも、なぜか歯ごたえのある風にも聞こえた。そりゃあ、父のあの馬券のおかげで、今の暮らしが成り立ってはいえるものの、その名前を猫にまでとは・・・、と首をかしげながら思っていた。

「その名前だと、この猫ちゃんが可愛そうだよ。」

母は、猫の顔を見て、父の顔を見た。

「お前のその存在そのものが、この猫に害をおよぼし・・・。」

この時、一瞬殺気を覚えた。父もそれに悟ったせいかな、

「お前のその名前も可愛げがあるな。」

台所にあるナイフを手に取っていた母に気がつかったせいかな、その証言は肯定側に少しだけ聞こえた。

さっき言いかけていた言い分と全く違う　　そう思いながら・・・

「そうでしょう。　アナタも良く分かってくれてるのね。嬉しい

」

今までの嵐のような空気を一瞬にしてこの人は消した。

(アンタが、強制的に分からせたんだろ・・・)

「健ちゃんは、どうなの？」

母は、僕に対しては感情をむき出しにはしなかった。

「僕は・・・。」

と言いかけた瞬間、

「ならさあ、一人一人が名前を読んで、読んだ人の所に来たのを名前にしたらどう？」

父が久しぶりに、カツまともなアイデアを引っ張り出してきたので僕と母はびっくりしていた。　僕達は啞然としていた。

さらに、僕の言おうとしていたことより早く言われたせいかな、なぜだか知らないけど、虚しさを感じてまった。



でも、父の言うことにも一理あるかもって思った。それで、すぐさまOKサインを出した。

そんなことを言っている内にすぐさま、実行をした。先手は母であつた。

「では、早速……。チデジちゃ〜ん」

母は、両腕を左右に伸ばして猫を勧誘していた。次に父だつた。

「嫌、ディープインパクト、こっちに来るんだ。」

父は父で、手招きで誘っている。最後に僕だつた。

「モンタ、おいで。」

僕は、この二人を見ていたが、それに構わず、両手を差し出した。モンタ……。いや、子猫は、起きていた。そして、地面を赤ちゃんのようによちよち歩いていて、とても可愛げがあつた。

子猫は、今何が起こっているんだ？という感情がわき出てきたせいか、目を丸くして、こつちを伺っていた。

子猫は、僕達家族3人の手間を往復するように歩いていて、人をおちよくつているかのようにも見えた。

するとその時、子猫は、

「ニャ〜〜 ニャニャ」

と言いながらも、僕の所に来た。最初からこつちすると考えているかのように……。。

「あ〜、アタシのチデジちゃ〜ん！」

母は、両手を前顔に当てていた。

「ディ、ディープ……。。」

父は、誰かが遠くに言つて、それを引き止めるかのような手を伸ばして、こちらに向けていた。

「しょうがないわね。モンタにしまっしょか」

母は吹っ切れたかのように、この現実受け止めていた。しかし一方父は、

「デープ・・・イープ・・・ニープ・・・」

と、ぼそぼそ地面に何かを書いているかのような手の動きをさせていた。

これで、名前は「モンタ」になった

長い長い名前選びだった・・・。そう、この猫にとっては、  
うでもいいことかもしれないが・・・。

### 第3章 名前は・・・（後書き）

今回も、時間があんまり経っていません。名前を決めるだけで終わってしまいました。そこを許せない方がいましたら、深くお詫び申し上げます。

次回も、読んでくれることを祈りつつ・・・。

第4章 異変・・・ (前書き)

次に繋げるための部分なんで短いです。

## 第4章 異変・・・

青い空は飛行機雲と巻雲に覆われていた。

そう、周りにはあの見慣れた電柱と1箱のダンボールが物語るように居座っていた。

そして・・・あの例の「少年」まで居た。

少年は、開いているダンボールに目を向けていた。　そう、まるでお地藏さんのように固まったまま・・・。

周りには人一人さえ見当たらない・・・。　むしろ、この2匹の動物以外に生き物がいない・・・。　そのような雰囲気だった。

少年は、今まで固らせておいた身体を解除し、ダンボールの中に寝ている子猫を抱き抱えた。

そして、子猫を抱き抱えたまま元の通行路に戻り、そのまま終わりのない道を少しづつ歩いていった・・・。　しかし、この時子猫は目を覚ましていた。　その狸寝入りをしていた眼は、神様のような眼・・・　そんな眼をしていた　。

ピピピピピピピ・・・　ガチャンツ

「・・・・・・・・」

僕は目がボヤケて2、3分間くらいぼくっとしていた。

そこで、何気なく自分の横の方へと目を傾きかけると　モンタが居た。　寝ているようだ。

「猫の寝顔ってこんな風だったんだ・・・。可愛いな・・・。」

僕は微笑した。猫の寝顔がここまでやすらぎのあるものとは到底思わなかった。

そして、僕はモンタに布団を掛け直してあげた。今日の夢のことを考えながら……。そして僕は、この場を立ち去った。

バタバタバタバタ……。僕は階段を下りて居間へと向かった。

いいにおいがする。。「まさか!?!」

僕は、一瞬目を疑った。何と母が料理をしていたのである。

「か、母さん!? ど、ど、ど、どうしたの!? 熱でもあるんじゃないの?」

料理をしていた母の手がピタリと止まり、

「なあ〜にい〜 健ちゃあ〜ん!? お母さんが料理をして何か不満でもあるのお〜?!?!」

「いや、不満はないよ。でも、急にどうしたの? 今までフライパンすら触らなかったのに……」

母はこの言葉を聞いて深いため息を吐き、半泣き顔で僕の方へ迫ってきた。

「お父さんが、お父さんが、お父さんが……」

母は泣き出した。そしてその声は嘆いているようにも聞こえた。

「お父さんが、料理を作らない嫁なんていらないうて言ってきたのよ……。うわあ〜ん!!! くやぢい!!!」

僕は、この世のどん底に突き落とされたかのような気持ちで呆れた。

(バカか……。コイツ……。)

母は、鼻をジュルジュル鳴らして、

「それでね、それでね、料理が作れんのなら出てけ だってえ

〜!!! ヒドイと思わない!?!」

「僕は、ヒドイというか、あの父さんがそ〜いうコト言っなんて信じれないと思うけど……。」

僕は、飽きれながらも不思議に思っていた。あの無関心のような態

度をとっていた父さんが、いきなり神経質になったかのように喋りだし、毒舌にまでなるなんて……。不思議でならなかった。

「お母さんもちよつとは疑惑に思っただよ！？」　でも、その疑惑がなかなか肯定にならなくてねえ……。そのまま現実を受け止めてしまったのよ……。」

お母さんは、いつの間にか泣き止んでいた。　でも、目を真っ赤にしながら返答をしていた。

「んで、そのご本人は？」

僕は、当たりを見回した。

「お父さん！？　そ〜いや、どこに行ったのかしら……？　さつきまで、居たのに……。」

「本人が居ないと話が進まないじゃん。　どこに行ったのかな……。」

僕は、途方に暮れていた。

「でも、すぐに帰ってくるんじゃないかな？　あの人気まぐれな性格だから……。」

「それもそうだね。」

僕は、母さんの意見に同意した。　しかし結局父さんは、夜になつても帰って来なかった……。

#### 第4章 異変・・・ (後書き)

今まで忙しくてなかなか書けませんでした。今回短いですが、ようやく書けました。



## 第5章 おかえり（前書き）

この章のストーリーは考えて考えて、考えた末出来上がったストーリーです。なのでちょっと趣旨とズレてしまいがちですが、何とか成り立っているかと思えます。それは、この章限定とは言えませんが・・・。

## 第5章 おかえり

### 次の日の朝

「う．．．う．．．」

僕は、ソファーに横たわるようにして寝ていた。そして、僕の体の上に薄い毛布が一枚敷かれていた。

外は、ちゅんちゅんと鳥のさえずりが聞こえる。家の中は、その鳥のさえずりしか聞こえなかった。そう、それだけ静かなのだ．．．。

僕は、今何時と言わんばかりの早さで時計を見た。

「9時か．．．」

僕は、漠然とした表情でそれを見ていた。

「そ．．．いえば、お母さんは、どこに行つたんだろ．．．」

母の姿が見えない。僕は、また心なしか大きな不安を抱えた。書置きの手紙もない。しかも、父を探しに行くとも一言も言わずに．．．。

「そ．．．いえばモンタも．．．」

モンタの姿も見あたらなかった。僕は、タンスの中、押入れの中、ベッドの下、屋根裏部屋、トイレなどあらゆる所を探した．．．けどモンタの姿は見当たらなかった。僕以外の家族全員の失踪。

「何かある．．．」

僕は、心無しか不安を抱えた。今から何かが起ころうとしている

そんな気がしたのだ。

気になって僕は外に出てみた。

「え．．．」

僕は、背筋が凍りついた。外には人一人見かけない上、まるで、自分以外誰もいないような．．．。そういうような景色だった。

ボタン！！！！僕は、急いで家に入った。ドアの音が今の僕の心の中の気持ちそのような物だった。

そして僕は、電気、ガス、水道、TVとあらゆる物をいじつてみた。

「嘘……だろ……。」

また僕は背筋が凍りついた。それは、現実を受け止める以外に他ならぬ状況だった。

そう、僕以外に人自体がないのだ……。

「そ、そうか！ これは夢なんだ……。そう夢なんだ……。」

僕は、夢であつてほしいと願いながら頬つぺたをつねつてみた。

「……！！」

気がついたら僕はベッドの上で大の字になつて天井を見上げていた。

もうすぐ夜が明けようとしていた。

「ゆ、夢だったんだ……。」

僕は心なしか、ホッと一安心した。それから僕は何気なく顔を横に向けた。

「モンタ……？」

僕はモンタの視線になぜかドキドキした。モンタが両手両足を地べたにつけ、きちんとした姿勢で僕の顔をじゅつと見ている。

……しばらくすると、モンタは重い腰を上げそのままさつさと部屋を出ていってしまった。

「モンタ、何か僕に言いたかったのかな……。」

僕は、モンタの姿が消えるまでずゅつとモンタを見続けていた

とその時、玄関の方からガチャンツ！

「今帰つたぞ……！」

どこかで聞き慣れた声……僕は目がぱちりになった。

「お、お父さん！？」

僕は寝ていた姿から2、3秒もしない時間で玄関に駆け下りた。

「ホントにお父さん・・・？」

僕は少し違う雰囲気を感じた。

「ホントに父さんだ。」

父はコクリと頷きながら言った。そこで僕は 男同士のキーワード というモノを思い出した。

実は父は前に誘拐されたのだ。理由は至ってシンプルで、父は「松井秀樹」という人物のモノマネというより変装が大得意なのである。

僕達家族ですら本物と疑ったものだった。ホントになかなかの出来で本人と全然区別がつかないという程まで似ていて、僕達家族以外の言わゆる他人の人も本人と間違えたり、その本物の「松井秀樹」も父さんの変装を見て、

「僕の分身さんですか・・・？」と結構ユーモラスなコトを言い出した。それから、かくかくしかじかで父さんはその人と仲良くなってしまった。

しかし、その変装のせいで悪の組織、「ビューティフル」が本人と間違えて父さんを連れ去ってしまったのである。

連れ去り方は「ビューティフル」の一人の「さとうかま緒」が

「こつちに来ないと」プンプン！！」って言ってあっさり行ってしまつて連れ去られた。何という大ボケな父さんだろう・・・。つてこの時僕は、この人から本当に生まれたのか？ という疑問さえも疑った。

でも、そこで一人のデカ（刑事）が名乗り出たのである。何でも誘拐犯捕獲率100%とか・・・。

その人の名前は「みの・みよんた」である。あの人の「ファイナルアンサー？」って言って、じつと見つめてくる攻撃が誘拐犯の心を動かし心変わりをさせるといふのがこの人の大得意策略だ。

そして本人が登場して、「みの・みよんた」が「さとうかま緒」に「ファイナルアンサー？」って嫌味ったらしく言って「さとうかま緒」は、

「みよんちゃくん・・・プンプン！！」　って言って二人は見合っ  
た。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

長い沈黙が流れ・・・

「観念します・・・プン。」　こうして事件は無事解決した。

人これを「みの・かま事件」と言う。　通称「M・K」

この事件のせいで父の変装がさらなる進化を遂げてしまった。

それはなぜか・・・。　理由は、

「また、さとうかま緒以外の　ビューティフル　に会いたいな」

という憧れ意識を持ってしまったのである・・・。　ホントに何を

言ってもダメな父である。そこで、僕達は考えた

それは、本物と偽者を区別するべく「キーワード」を決めるように

促した。　そしてこの「キーワード」は案の定、役に立った。

でも、変装をやってもやっても一向に「ビューティフル」が現われ

なかったのだ、最近父さんは変装に飽きたせいかな全然しなくなって、

このキーワードも全然使われなくなってしまった　。

僕は不安だった。最近使っていないこの言葉。　果たして父さんは

覚えているかどうか・・・。

そこで僕は賭けた。　そして父さんに、

「父さん、あのキーワード言って！」

父さんは自信満々に、

「フランケン参上。」

そう、これだ!!!　これが僕の待ち望んでいた答え……

「って違〜う!!!」

僕は、すっかりこの父さんのペースにはまってしまった。僕は父さんのペースにはまってしまつとノリ突っ込みしてしまうコトも多々あるのだ。

「ん？ キーワード変更しなかったか？ あの サイゼリヤ で。」

父は真顔だった。

「そこは、ご飯食うところでしょ!!!　何でそこでいちいち変更しなけりゃイケナイの!？」

僕は父さんがいきなり何故こんなことを言うのかが気がしれなかった。

「あ、してない……か。　ゴメンゴメン。　ボケてたよ。」

父は照れ笑いしながら頭を撫でていた。

僕は呆れた……。

「父さん、次はボケなしでお願いします……。」

父さんは一呼吸して、

「たわたたれたたほんたた、たもたたたたのたた。　追記：狸。」

父は途中舌を噛んだ。　その証拠が「、」　これである。

でも、舌を噛む以外はすらすら言っていたのでしっかり覚えているのだなと思つて、

「おかえり、良く覚えてたね。」

僕はほつとして胸を撫で下ろした。

「お前もな。」

父も父で僕にニッコリ顔で答えた。



第5章 おかえり（後書き）

次もお楽しみに



## 第6章 疑惑・・・（前書き）

この章はほとんどが会話です。

## 第6章 疑惑・・・

僕と父は玄関に向き合ったままである。

でも僕の心中はまだ晴れなかった。その理由は、突然母へのあの言動と、突然の失踪の疑惑である。

「あのさあ父さん、聞きたいことがあるんだけど・・・。」

僕は、今までの場の空気を追い払うかのように父に設問を繰り出した。

「ああ・・・。」

父も父で、僕の言いたいことを悟ったかのような返事だった。

父は履いていた靴を脱いで、僕と一緒に居間の食卓に向かった。

「さて・・・。」

僕は、始めに父に「今から何か言うから準備しといて」と言わんばかりの言葉を促した。そして僕は本題を切り出した。

「率直に言うね。昨日のあの言動と動作（失踪）だけど、何でそんなことを・・・？」

僕は、単刀直入に申した。

父は、準備しておいた言葉があるかのように真面目な答えを言った。

「その理由はだな、父さん昨日の朝久々に夢を見たんだ。その夢でな、今からこうしろと言わんばかりの光景を目にしたんだ。その光景こそがアノ言動と動作なんだ。それから目が覚めて、自分の意思がコントロール出来なかったんだ。自分の身体が全然言うコトすら聞いてくれなかったんだ・・・。まるで、潜在意識が自分の意思を支配されたかのような・・・。そんな気分だったんだ。

それから母さんにあのコトを言ってしまったんだ・・・。そ

の時も自分の意思は誰かにコントロールされたいんだが、でも意識はあった。それから家を出て足が勝手に動いて、

「神聖なる森」っていう所の入り口まで行かされて、そこで初めて意識を失ってしまったんだ。それから気がついたら、道路の端

の電柱の隣に立っていたんだ……。父さんが覚えているのはここまでだ。あ、あと、夢から覚めた時に何かモンタが居たような気がしたな……。何かこっちをじゅつと見てたな……。」

父は外に視線をやって、それから僕の方を向いた。

「え……？」

僕は一瞬耳を疑った。

「モ……モンタ……!？」

そして、僕もこの奇妙な出来事を父さんに話した。

「僕も今朝そんな光景を目にしたんだ。そう、あのじゅつと見つめたモンタの顔……。僕はその顔がどうしても忘れることが出来ていなくなった……。ずゅつと気になってたんだ……。でも、僕と父さんとは、少し体験が違うね。父さんはそれから意思が働いていなかったらしいけど、僕はちゃんと意思が働いていたよ。」

僕は、今まで貯めていた言葉と共に、感情まで流した。

「その時、モンタ何はずゅつと健信の方をずゅつと見ていたのか？」

父は、心配そうに僕の顔を見た。

「ううん、じゅつと見た後、それからモノ寂しそうな表情でその場を立ち去ったんだ……。」

僕は、父にこれ以上心配をかけないようにと感情をコントロールした。

「だからか……。その違いがあるか、ないかでこんなにも差があるなんてな……。父さんはずゅつと見られていた……。あのモンタの表情……。父さんも何かあると踏んでいたんだが……。」

父は頭を抱えていた。

「それに、モンタが来てからだよね……？ 色々と変なコトが起きてきたこと……。」

「父さんもそう思う。 実はな……、あの時モンタを飼おうとしてたころあったろ？ あの時な、実はモンタは父さんが見つけて来て連れてきたんだよ……。 母さんは、外にちよこんつて座っているのを見かけて 「始めからここに居る」という思考が吹き上がっていたんだと思っただらしく、それをお前に吹き込んで、お前も驚いていたろうけど、実はあれは、違っただ。」

父は自分の閉まっておいた悩みの存在の感情を僕にどどんぶつてきた。

「本当はな、父さんの意識が気がついたあの「電柱の隣の壁」の所からモンタが急に出てきたんだよ。 何か時空を超えた感じみたいな。 ああ、この話は、モンタを飼い始める前のことだからな。」

僕はまた、背筋がぞくつとした。 そして、僕は恐る恐る気になっているコトを質問した。

「じゃあ……、その近くにダンボール無かった……？」

「ああ……、そういえば、在ったな。 何かこう、ちようど、猫の入るくらいなの。 でも始めから開いていたからそんなに気にはならなかったけどな。」

僕は、心の中にある疑惑の一つをここで追い払うかのように、

「じゃあ、あの猫「モンタ」は何かある と踏んだ方がいいんだね？」

父さんも納得したような感じで、

「父さんもそう思う。」

でも、僕はさっきの証言でまた一つ疑問が出来上がってしまった

「でもさ、父さん、じゃあ、何であの得体の知れない猫を持ってきたの？」

父さんは笑いながら、

「ほら、父さん珍しいモノ好きだから……。」

「全く……父さんは……。」

また僕は呆れた。それで、僕はこれからのコトを切り出した。

「それで、父さんこれからあのモンタどうするよ……?」

父さんは心決めていたかのように、

「まず、捨てるのはダメだ！何か父さんの直感では、あの猫のコトは誰にも言わない方がいいと思うような気がするんだ……。だから、もう少し様子を見てみないか？母さんには、アノ人本人も体験したら父さんから言うようにしておくからさ。」

僕は、この父さんの直感が真実以外に何者でもないかのように思えた。

そう、僕も「何かある……」と踏んでいるのだ。これだけ奇妙なコトが起きれば、どんな鈍感な人でも少しは、怪しいと思う。

そうこう考えている内に、終点が父さんと同じ考えに辿り付いた。

「僕もそう思うな。」

そうこうと父と話していて、父が目を擦りながら、

「さて、父さんはまだあんまり寝てないから寝かせてもらおうよ？

最善の注意を払って……」

「うん、あんなコトが起きちゃったもんね。無理ないよ。ぐっ

すり眠ってね。あと、気をつけて……。」

父と僕との会話に一度ピリオドを打とうとした　その時、

「か……母さん!!??」

「お……おまえ……。」

僕と父さんは目の前に置かれている状況に、とてもじゃないけど現実らしくないものに見えた。でも今は現実の世界にいる。僕達はそのことを良く分かっている。そして……、

「いつもいつも……母さんを一人にして……。いつもいつも仲間外れにして……。そんなに母さんをいじめて楽しいの!!!?　もう許さない……。誰もかも居なくなっちゃえばいいのよ。」

・・・。　　アンタ達も死んじやえばいいのよ！！！！！！」

今までにないマジな母の殺気。　母の感情はもう、誰にも止められない程まで達していた。　喜怒哀楽の「喜」と「楽」以外の感情が、最大限までに高ぶっているような感じだった。

そして、台所にある包丁を2本手に持って、

「母さん！！　落ち着いて！！　気を確かにして〜！！」

「お前らしくないぞ！！　まずは、落ち着け！！」

僕と父は必死に母をなだめた。　でも母はこの声が聞こえていないかのようにだった。　そして、誰かに操られているかのように、

「ユルサナイ・・・ユルサナイ・・・　シネ・・・。」

と言って、僕達二人に包丁を手を持って、襲いかかってきた。

## 第6章 疑惑・・・（後書き）

今までの中で一番感情を込めて書きました  
次回もお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7060a/>

---

猫の存在

2010年10月21日13時44分発行